

街にて

しづかな 午前の光の 中を ぶんぶん蜂が とんで行つた  
白い雲の 方へ のぼつて 行つた 建物の向ふに まがつて 行つた  
私はまぶしい太陽を みつめながら 汗をたらして 疲れたまま  
風のない 街に 佇んでゐた みどりの 山々に かこまれて  
こんこんと水が 流れてゐる とほい ふるさを 思ひながら  
いつか そこへ 帰つて 行かう 友達と 親しくしよう と 考へてゐた  
私を 見逃す人の 視線を ねたましい気持で 見つめながら  
こころの 中では 叫んで みた  
(お前は 後悔 するだらう  
お前は おれに やられるぞ)  
さうして 私は 佇んで みた いつまでも 女の人を 待つて みた  
どこか 建物の 影から 来て 私の肩を たたいてくれ  
なぐさめて くれるのを 求めて 午前の 日ざしが 真上に 来て  
うるさい サイレンの 鳴る頃まで ぼんやり しょんぼり 佇んでゐた